

第91回公開シンポジウム

## お稽古からたしなみへ～女学生文化の系譜～

- ◆ プレゼンター      稲垣 恭子  
京都大学大学院教育学研究科教授／教育社会学
  
- ◆ パネリスト        池田 太臣  
甲南女子大学人間科学部文化社会学科准教授／若者文化論
  
- ◆ 司 会              一色 伸夫  
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第91回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「お稽古からたしなみへ～女学生文化の系譜～」というテーマです。

NHKの大河ドラマで今「八重の桜」を放送していますが、「八重の桜」の新島八重や新宿中村屋を創業した相馬黒光。彼女たちが「明治のハンサムウーマン」といわれるのはなぜでしょうか。旧制の女学生文化のひとつの特徴は、知識や学問的な教養だけでなく、稽古事や身体作法を通した「たしなみ」を重視していたことです。そこで、明治の女学生から現在までつながる「もう一つの教養」の系譜をたどりながら現代における教養の意味を再考していきます。皆さん方、女子大生にとっては明治から大正、大正から昭和、昭和からの平成という中でどのように移り変わってきて、これからどうなるか。その辺りについて、関心が大いにあると思います。

基調講演のプレゼンターに京都大学大学院教育学研究科教授でご専門が教育社会学の稲垣恭子先生においでいただいております。稲垣先生のご略歴を申し上げます。京都大学を卒業されて、滋賀大学、それから京都大学に戻られてその間、英国、オックスフォード大学、ヨーク大学の客員研究員、放送大学客員教授などを歴任されています。研究テーマとしては、女性の教養と理想的な女性像の歴史、社会学的な研究や女性文化人の社会学的研究などいろいろなご研究をされています。

そしてパネリストとして本学の文化社会学科の池田太臣先生にお願いしています。池田先生は、若者文化論といった方面に精通されていて、専門分野は理論社会学、社会学説史で、サブカルチャー論や若者文化論を研究テーマにされており、他学科の先生方と共に『「女子」の時代!』という本をお書きになられています。では、稲垣先生、よろしく願いいたします。

稲垣：皆さん、こんにちは。今、一色先生からご紹介いただきましたように私は教育社会学を専門にしています。今日は女学生文化、女性の教養文化の特徴について、あまり最近使わない言葉ですが、「たしなみ」という観点からお話をさせていただきます。女子教育で伝統のある甲南女子

大学でこのようなテーマでお話しまた議論する機会ができて、大変光栄に思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

具体的に話を始める前に、なぜこのようなテーマに興味を持つようになったかについて、自己紹介を兼ねて少しお話させていただきます。

私事で恐縮ですが、私の母は今85歳か86歳になっていますが、お蔭さまでとても元気で、毎日あちらこちらに出かけて、帰宅も私よりも遅いのです。どこに行っているのかというと、近所にできたジャズバーに通っているのです。昔は、歌舞伎とか三味線が好きだったのですが、今はジャズにはまっているということで、ライブにも遅くまで行っています。他にも古代史研究会と称して仲良しグループで読書会をしたり、琵琶湖散策をしたりしています。

そのようなことを見ていると、私は仕事で本を読んだり書いたりしますが、仕事でもなく報酬もなく、いろいろと好奇心を持って本を読んだりするだろうかと思ったりします。何かのために、例えば資格を取るためにとか、仕事に必要なだからというのではなく、音楽を聴いたり読書すること自体が報酬になっている。

母親のそのような教養志向とか知的好奇心のようなものがどこで養われたのか思っていると、どうも女学校時代のようなようです。後でお話しますが、教養というと、一般には、旧制高校のような戦前の男子の学生文化を指すことが正統の教養文化といわれてきたのですが、実は、このようにいわば純粋な教養志向というのは、女学生文化の中で維持されてきた側面が大きいのではないかと思うようになったわけです。戦前の女学校の教育というのは、所謂、良妻賢母主義を掲げて家事、裁縫など実用的な技術、知識を中心にしていただと思われがちですが、それだけではなく、実は実用とは離れた教養を大事にしていた面もあったのです。それが、もう一つの教養の系譜としての女学生文化に興味を持つようになったきっかけです。

しかし、「おもてなし」の方は有名になりましたが、「たしなみ」も「教養」も最近ではどのようなものであるかピンと来ない、もう死語に近くなっているものかもしれない。それでどういうものを私たちは教養と呼んできたのか。まず教養のメインストリームである男子を中心とする日本の教養主義について最初に簡単に説明しまして、それを踏まえてもう一つの教養の系譜として女学生の文化について紹介し、たしなみの意味について考えてみたいと思います。

最初に教養主義とはどういうものかについてお話します。皆さんは小説などを読む機会があると思うのですが、本を読む魅力はどこにあるのか。情報を得るという点では、インターネットなどの方が便利なのですが、読書の場合は、情報を得るという点だけではなくて、自分の知らない世界と接触できるという魅力もあったと思うのです。歴史書を通して、中世の暮らしや価値観を知る。文学作品を通して人間の欲望とか希望について考えると、そういうきっかけになったりもする。すぐに何か役に立つというわけではないけれども、社会とか生き方を考え直す土台になるような読書の仕方、このような読書を中心にしたものが教養主義的な読書といわれてきたものです。

教養主義というのは、戦前の旧制高校を中心に広がっていった学生文化のことを主に指します。旧制高校とは、現在の高等学校よりも一つ上の段階の高等教育の部類に入るわけで、大学の1、2年生

ぐらいいに対応する学校段階です。ですから旧制高校を卒業した人は殆ど大学に進学しています。特に、この教養主義の中心になったのは、第一高等学校です。現在の東京大学の駒場に当たるのですが、ここに新渡戸稲造が校長先生として赴任をしてきて、それまでは学生文化というマツチヨな運動部が中心のバンカラ主義だったのですが、その学生文化を一掃して、文学とか宗教とか哲学などの読書を通して内面を形成しようとする雰囲気生まれてくるわけです。しかし、最初の頃、そのような学生は軟派とか文弱と言われて、殴られたりいじめられたりしていたようです。作家の谷崎潤一郎とか哲学者の和辻哲郎などはちょうどこの時期に第一高等学校を卒業しているのですが、運動部の学生に文学など軟弱と言って殴られたというエピソードもあります。しかし、大正期になりますと、野蛮なバンカラ主義も影を潜めて、教養主義が学生文化の中心になっていきました。それを大正教養主義と呼んでいます。

皆さんは教科書で夏目漱石の「こころ」を知っていると思いますが、これは、ちょうどこの時代の学生文化を背景にして書かれた小説でもあります。主人公の「私」は時代背景から見ると、当時東京帝大の学生です。大学に入ったけれども大学の授業に出てあまり面白くなくて、人生に悩んでいる。そういう時に偶然、「先生」に出会って、「先生」の家に通うようになります。「先生」といっても、学校の先生でもなく、何かを教えているわけでもありません。むしろ、仕事をしないでぶらぶらして暮らしている。ところが本はよく読んでいて、考えていることや言うことはとても面白い。それに魅かれて、「先生」と呼んで家に通うわけです。当時、「先生」は、明治20年代に東京帝大を卒業しているという設定なのですが、その頃は東大を卒業すると無試験で官僚になれたわけですから、そういう時代にわざわざ官僚にならずに何か違うことを考えて生きている。それがちょうど「私」の悩みと響き合ったのです。「私」も学校に行ってもあまり面白くない。でもどうやって生きていったらいいのかと人生に悩む青年、当時、煩悶青年と言ったのですが、そういう青年の一人がこの「私」だったのです。このような「こころ」の先生や「私」のように、専門のことを勉強するだけではなくて、いろいろ本を読んで議論をしたりしながら人生を考える。そういう態度が教養主義と呼ばれたものの核心になるものです。

この頃、京都大学では文学部の哲学科に善の研究で有名な西田幾多郎先生がいて、大きな講義室で授業をしても立ち見が出るほどの人気の授業だった。その西田先生はその出で立ちが特異で、着物の着流しに靴を履いていて、教壇を行ったり来たりしながら、ぶつぶつと自分の創った理論を話す。途中でうっと詰まって途切れることもあったそうです。聞いている学生たちは、言っている内容は難しすぎて殆どわからなかったけれども、何か話し方とか先生の態度にはすごいと思わせるオーラがあった。だから哲学を専攻するわけではない学生も、西田先生の講義には出席をしていた人も多く、この西田先生の著書『善の研究』は学生の必読書にもなっていた。わかってもわからなくても読まなければならない本であったのです。

それ以外にもここに挙げている『三太郎の日記』とか『愛と認識との出発』、それから西洋の哲学書。当時、「デカンショ、デカンショで半年は暮らす、後の半年は寝て暮らす」という替え歌が流行ったのですが、デカンショというのは、デカルト、カント、ショーペンハウエルという西洋の哲学者、これを毎日下宿で読んで、半年ぐらいて後の半年はぼっとして暮らすというのが、当時の典型的な学生生活、今のように忙しい学生生活とは違っていたようです。

このような広い意味での読書を中心とした教養主義、そんな時代もあったのかという感じですが、戦後も1970年代ぐらいまでは、大学生に共通の文化としてあったように思います。それから後は段々と消えていくことになります。

このような読書によって内面を形成する教養主義というのは、同じ教養文化と言ってもヨーロッパの特にイギリス、フランスの教養文化とはかなり違うように思います。フランスやイギリスの場合は、社交の場でユーモアのある会話ができるとか、センスのいい誉め方ができるとか気配りがある、立ち振る舞いが美しいなど、そういうことを含めて教養と捉える傾向があります。つまり、内面だけではなく身体作法とか外面というのも教養の一部として捉えているわけですが、それに対して旧制高校を中心とする日本型の教養主義は、内面にストックされたものが重要であって、外見は関係ない、むしろ外見が汚いほど内面が優れているように見えるというくらいで、そういう意味では溜め込み系の教養（竹内洋）といわれることもあります。

ですから日本型の教養主義はユーモアがあって人を逸らさないような、社交とか振る舞いの洗練というものではなくて、努力とか勤勉というのを重視する刻苦勉励的なエトスであったと言われていています（竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論社）。日本型教養主義というのが、努力と勤勉を軸とする刻苦勉励型の教養だとすると、女学生、女性の教養文化は、同じ時期でもかなり違っていたと思われます。

その点、女学生の教養という時には、内面重視の田舎風の男子教養主義とは違って、ものの言い方とか振る舞いなど、幅広さを持ったものを教養を意味することが多いと思います。それでは、このような女学生的な文化、教養がどういうものかについて、もう少し具体的に紹介します。

まず、歴史を遡って話をすることになるのですが、明治以降の教養女性の典型、これが女学生というカテゴリーで呼ばれていたわけです。明治になるまでは、寺子屋や自宅で個人的に学ぶことがあっても、多くの女子は勉強する、学問をする機会は殆どなかった。ですから、明治になって、読書や学問をする女性が現れたのは、新しい社会現象でもあったわけで、女学生という存在は注目の的だったようです。地方では、女学生というのを殆どみたことがないので、近所に女学校に行く生徒ができたという、朝、わざわざ女学生が通っていく時間に窓を開けて、その姿を一目見ようとしていたぐらい珍しかったようです。

明治の最初の頃は、北は函館から仙台、東京の築地、横浜、神戸、長崎といった開港地にキリスト系のミッション女学校がたくさんつくられていきました。それが初期の女学校です。殆どは、直接アメリカンボードが経営していて、生活様式も外国式だし授業も全部英語で行なっていたりするので英語もよくできていたようです。その後、明治32年に高等女学校令が公布され公立の女学校が各県にできていって全国に広がっていきました。

明治時代に女学校以上の教育を受けた女性には、元は武士の家庭の士族の子女が比較的が多かったようです。キリスト系のミッション女学校であってもそれは同じで、従って、彼女たちは、いずれも家庭では武家的なエトスを土台としてしつけを受けて育つのですが、一方で、学校では、西洋的で合理的な考えを取り入れて勉強するという、先端的な女性でもあったのです。その両方を経験していたわけです。

このような和洋の教養文化に親しんだ明治の教養女性として、今、綾瀬はるかさんが主演したNHKドラマの「八重の桜」のモデルでもある新島八重さんとか、「小公子」の翻訳で有名になった若松賤子さん、ご存知でしょうか。それからカレーとか月餅で有名な新宿中村屋の創業者である相馬黒光さんとか、日本ではあまり知られていませんが、アメリカで出版した自伝がベストセラーになった杉本鉞子さんなどの名前が挙げられます。今申し上げた人は皆、武士の娘で且つミッションスクールに通った経験を持つ人たちです。

もう少し具体的に紹介しましょう。新島八重についてはドラマを見た人はご存知だと思いますが、幕末に福島会津の城を守るために先頭をきって闘って、維新後は同志社大学の創始者である新島襄と結婚して同志社の運営に尽力しました。また、京都で最初の看護教育は同志社に附設された京都看護婦学校から始まるのですが、それにも尽力した女丈夫と言えるような人です。

それから若松賤子も会津藩の武士の娘であったわけですが、維新後はフェリス女学院で教育を受け、その後、明治女学校という東京にあった有名な女学校の創設者である巖本善治と結婚します。児童文学の翻訳を手がけ、特に「小公子」の翻訳をしたことで有名な人です。外国語に堪能で、キリスト教にも親しんだ人ですが、一方では論語とか漢学も修めていて、生涯、洋服は着ないで和服で通したそうです。和洋両方の教養や伝統的なたしなみを併せた「女学」が明治女学校の教育方針だったのですが、まさにその「女学」を体現した生き方といえるでしょう。

それから、相馬黒光はカレーや月餅で有名な新宿中村屋の創業者ですが、女学校は仙台の宮城女学校というミッションスクールに通っていました。宮城女学校というのもアメリカンボードの学校ですので、直輸入の教育をしていましたが、日本の女学校なのにアメリカと同じ教育をするのはおかしいではないかという女学生たちと校長との間で紛争がおき、5人の女学生が退学処分になるという事件が起きました。明治25年のことです。これが日本で初めての女学生のストライキだったわけですが、相馬黒光もその時にストライキ側の女学生に加担したということで、自ら学校を退学して東京の女学校に移っています。

そのように、西洋の学問や文化に憧れをもちながらも一方では、武士的な精神とか矜持をもった毅然とした女性というのが明治の女学生の典型的なタイプと言えると思います。そのような生き方が、今の私たちの目にはハンサムウーマンと映るのではないのでしょうか。

このような明治の教養女性がどのような教育を子どもの頃に受けていたのかを示す例として、杉本鉞子さんの自伝を取り上げてみます。杉本鉞子さんは、長岡藩、現在の新潟県に生まれた武家娘の一人です。日本ではそれほど有名ではないかもしれませんが、アメリカでは尊敬すべき日本女性の一人としてかなり有名になった人です。彼女の名前がアメリカで知られるようになったきっかけは、“A Daughter of the SAMURAI”（『武士の娘』という日本語の翻訳が後で出ます）という自伝を出版したことです。彼女は26歳の時に結婚してアメリカに渡り、その後ずっとアメリカで三十数年生活をし、53歳の時に自分の半生を本にして出版しています。それが大評判となり、ニューヨークタイムズでも紹介されてベストセラーになりました。当時、アインシュタインやタゴールも賞賛の言葉を述べたりしているのですが、特に注目されたのは彼女が受けた教育についてです。

ひとつ例を挙げると、杉本鉞子さんは、6歳ぐらいから禅宗の僧侶を師匠として家に来てもらって、「四書五経」の手ほどきを受けていたそうです。そのときのエピソードとして次のようなことが書かれています。ある時、いつものようにお稽古をしている時に、途中でつい姿勢を崩してしまったことがあった。その時の師匠の反応というのが、かすかに驚きの表情を浮かべて、その後静かに本を閉じ、厳しい態度ではあるけれども優しい口調で、「お嬢様、そんな気持ちで勉強はできません。お部屋に引き取ってお考えになられた方がよいと存じます」と言ったというのです。別に強く叱責されたわけではなく、そう言われたただけだけでも、深く恥入って自分の部屋に戻ったとその時の心境を述べています。その時のことは、後になっても思い出すと胸を刺すような痛みを覚えると書いているのをみると、子ども心にも当時とても自尊心が傷ついたのだということが伺えます。身体の作法を厳しくしつけるのは、単に外から体を矯正する、きちんとさせるように強制的に体を固めるだけではなくて、自分自身の誇りと自覚によるセルフコントロールを求める教育、しつけだったということがそこから伺えるわけです。外からの抑制、抑圧ではなくて、自己制御の精神として「たしなみ」というものが教育として重視されていたことがわかるエピソードです。

当時の彼女をよく知る人たちの回想や随想などのなかには、謙虚で優しいとか柔らかい物腰とか上品という印象をもったという記述がみられます。そういう内面の強さと外見の優しさ、或いは上品さと凛とした品格、このようなものがたしなみという価値であって、それが当時のアメリカ人にとってもたいへん魅力的に見えたのだと思います。そういう印象は彼女だけに限らず、女学生一般にも通じるものでもあったようです。戦前生まれのある作家の方が、私は女学生という言葉を聞いただけで何か自然に頭が下がってくるということを言われたことがあります。明治の女学生の雰囲気には、そうしたたしなみを身につけた品格のようなものがオーラとして醸し出されるものがあったのかもしれない。

ところで、作法書の定義によりますと、たしなみというのは、心がけること、つまり自分から進んで礼法を修めようとする心構えのことで、家庭や学校でしつけを受ける間に養われるものとされているようです(桜井役『礼法読本』増進堂 1942年)。では、しつけとたしなみはどう違うのかというと、しつけは外、他から与えられるものであるけれども、たしなみは自分が施すしつけである。自分が自分に対して施すしつけがたしなみだというわけです。女性のたしなみというときには、具体的には和漢の教養から武芸一般、茶道、華道、書道などの素養に加えて、更に裁縫、料理の心得などを含む広いものを指すのですが、このようなたしなみの教育では、稽古とか心掛けによって、知識の習得だけではなくて、身体の所作とか作法を獲得していくプロセスが重視される場所にも特徴があります。日常の立ち振る舞いは、所作の美しさを身につけると同時に、それを身につけていくプロセスで忍耐力とか胆力が培われる。たしなみはその両方を重視したものであったのです。そういう意味ではたしなみは、機能的なものと同時に倫理的なものとか審美的な美しさなど、すべてを含んだ概念として捉えられていたということができるといえるでしょう。

このようなものをたしなみの教養と呼ぶとすれば、それは内面だけではなくて、外見も含めたもの、精神力だけではなくて、審美的な美しさなども両方含んだ概念です。また、西洋的な学問知と日本的なたしなみの両方に渡る広い教養であるということが出来ます。女学生の教養が、たしなみに重点を置

いていたとすると、それは先ほど紹介しましたような旧制高校の男子の内面重視の溜め込み系の教養主義とは異なる、もうひとつの教養の系譜なのだという意味が少しお分かりいただけるかと思います。

このような明治の女学生のたしなみ教的教養は、大正・昭和になって時代がもう少し新しくなると、徐々にそのイメージも実態も変わっていきます。私たちが漫画などを通して思い描く昔の女学生というと、大正時代の女学生のことをイメージすることが多いと思うのですが、実際に大正・昭和になると、女学生の数も増えて雰囲気も少しずつ変わっていきます。簡単に女学生の変化をみますと、このグラフでもわかりますように、明治のころは女学生は5%もいないわけですから、とても少ないのです。歩いているだけでも珍しいというも頷けるわけです。これが大正9年になると、この大正9年は甲南女学校が創立された年ですが、それで9%ほどです。1930年、つまり大正14年ぐらになると15%、1945年には25%と増加していきます。

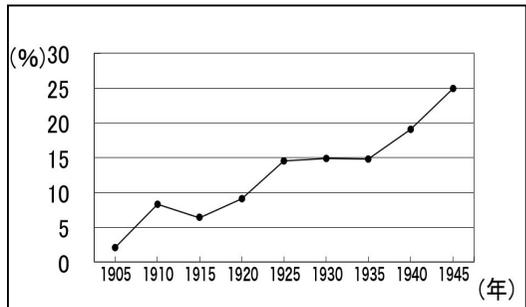


図1. 女学校の拡大

それでも今の大学進学率より遥かに少ないのですが、ある程度のまとまりをもった集団になってくるわけです。このようになってきた時に、サブカルチャー的なものも含めて独特の文化が生まれるのですが、その特徴を少し紹介します。

私は戦前に関西の女学校を卒業した方たちにアンケート調査をしたことがありますので、主にそれを軸に紹介したいと思います。まず、服装やヘアスタイルはどうであったか。これは、明治に比べると、大正・昭和になると段々と華やかになってきます。明治の女学生は、袴に日本髪というスタイルが一般的ですが、袴に髪は束髪でリボンをつけるというスタイルは、当時の最新ファッションでした。大正時代には、矢継の着物に海老茶の袴を着て、編み上げの靴、これがハイカラな女学生スタイルとして大流行しました。『ハイカラさんが通る』という漫画でも有名になったスタイルです。このようなスタイルが女学生ファッションで憧れでもあったのです。

勉強の方は、真面目に勉強していたのは共通ですが、家庭での勉強時間は授業の他に1日大体2、3時間勉強するというのが平均であったようです。好きな学科と嫌いな学科を見ますと、圧倒的に好きだったのが国語でした。国語嫌いという人は殆どいなかった。それとは対照的に、家事裁縫は女学校教育の重要な柱の一つだったにも関わらず、女学生自身はあまり好きではなかった。嫌いな人の方が多い。案外人気がなかったのです。

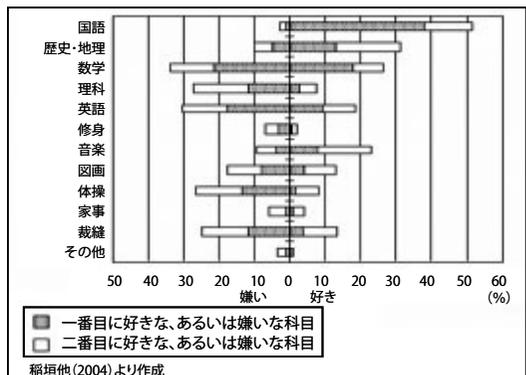


図2. 好きな科目と嫌いな科目

ただ、学校別に見ると、少し違いもありまして、これは関西の女学校別に家事裁縫好きと家事裁縫嫌いをプロットしたものです。横が家事裁縫好

き、縦が家事裁縫嫌いです。すると、一番左の端のゼロ、家事裁縫好きが誰もいないのが小林聖心の生徒で、甲南、第一神戸、神戸女学院、神戸近辺の女学校の人たちは、大体家事裁縫嫌いに偏っていたようです。逆に彦根とか長浜、愛知など滋賀県公立女学校は家事裁縫好き、得意な方が多かったです。学校によっては違うということもあります。

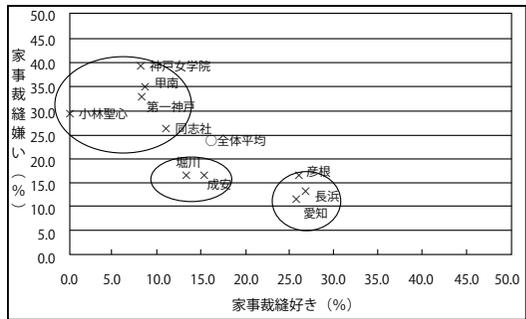


図3. 学校別にみた家事志向度

女学生は国語好きでしたが、国語好きとは、たいてい文学、小説好きと対応していたようです。では、どういうジャンルの本を読んでいたのか。主に純文学の中でも日本文学、それと少女小説。このふたつが二大お好みの文学ジャンルでした。よく読まれて人気があった本としては、具体的には『坊ちゃん』とか『我輩は猫である』などの夏目漱石のものや、樋口一葉『たけくらべ』、それから圧倒的に人気があったのは吉屋信子の少女小説『花物語』、翻訳ものでは『小公子』とか『レ・ミゼラブル』『狭き門』などが挙げられます。女学生の読書というのは、文学とりわけ日本文学と少女小説が中心だったのですが、特に少女雑誌に掲載された少女小説、これは、女学生の共通の読み物で、女学生文化の発信地でもありました。

明治の終わりから大正にかけて、このような少女雑誌が次々と創刊されていき、女学生に愛読されるようになりました。特に一番部数が多かったのは『少女倶楽部』ですが、右上は『少女の友』で、これには中原淳一さんの挿絵が表紙についていますが、これもとても人気のあった雑誌の一つです。



図4. よく読まれた少女雑誌

特に、こうした少女雑誌に連載される少女小説はたいへんな人気を博していたのですが、中でも吉屋信子さんの少女小説は人気が高く、圧倒的によく読まれていたようです。その代表作が『花物語』です。これは、「すずらん」から始まって「さざんか」とか「ひなげし」など花の名前を冠した短い小説が連作で書かれたものです。最初は雑誌に連載されて7話で終わったのですが、もっと続けて欲しいという投稿がたくさんあったために更に継続しまして、結局54話、源氏物語と同じ話数まで続けられ、何度も単行本にもなっています。この写真は、昭和14年版の単行本化されたもので、これが一番売れているものです。写真は上巻だけですが、上・中・下と三冊本になっていて、この表紙の絵が中原淳一の絵です。これが長く女学生の愛読書になりました。

夢見るような大きな瞳とモダンでかわいい洋服とか持ち物、ヘアスタイルが圧倒的な人気で、ファッション図鑑とかイラスト入りの文房具も付録に付くようになり、そういう付録を今でも大切に持っている

人もいます。2000年には復刻版も出ています。中原淳一の挿絵とよく似ている画風で女性を描いて人気だったのが竹久夢二ですが、この二人の絵は似ているようでやはり少し違います。竹久夢二の絵は大抵、下向き加減で少し鬢りのある女性なのですが、中原淳一の描く少女は現代的でファッションブルな雰囲気です。

それから、学科の勉強とか読書の他に、習い事や稽古事をしてきた人もかなり多かったようです。家庭で習いに通わせる場合もありますし、学校で課外授業として開かれている場合もありましたけれども、その内容は、茶道が一番多く、茶道、華道、ピアノ、書道、琴、和裁と並んでいます。伝統的なものとモダンなものを両方習っている人も多かったようです。私の調査では、7割ぐらいの人が何らかの稽古事をしていて、半分近くの方は2つ以上をしている、というような状況でした。

どのような稽古事をしてきたかは、学校とか地域によってもかなり差があったようです。調査では、伝統的なお稽古事が多いのは、京都の堀川女学校でした。京都の織物問屋さんなどが住む地域の娘さんたちが通う学校だったので特に多いのですが、伝統的な稽古事が多いのは、この堀川と滋賀県の公立女学校です。モダンなお稽古事が多いのは同志社と神戸近辺の女学校で、特に神戸近辺はモダンも伝統も両方お稽古しているタイプの人が結構多かったようです。甲南女学校もそうです。甲南女学校は、甲南女子大学の前身の女学校だということをご存知ですよ。大正9年に創立されています。

こういう神戸近辺の女学校の特徴について考えるとき、その背景として関西モダニズムの影響もあると思います。関西モダニズムというのは、欧米の単なる翻訳文化ではなくて、上方商人の伝統的な学芸とか文化を尊重しながら、欧米文化も自由に取り入れていくような独特の和洋折衷の文化という意味合いで使っていることが多いと思います。この関西モダニズム、或いは阪神間モダニズムということもありますが、これは戦前に阪急沿線を中心として造られていったもので、宝塚歌劇がその典型です。小林一三さんが阪急電車の創設者ですが、今まで何もなかったところに電車を通して、当時みみず電車と悪口を言われたと言うぐらい、何も無いところに電車を通して、電車が止まる駅々に郊外住宅を造って開発していきます。住宅ローン販売が日本で初めてされたのも阪急沿線なのですが、そこに大阪とか神戸の会社、役所に勤めるサラリーマンが住むようになるわけです。住宅経営が軌道にのって、郊外住宅ができてくるようになった1920(大正9)年ぐらいから今度は、沿線に学園を誘致していきます。それに伴って、神戸女学院、甲南女学校、神戸海星女学校、小林聖心というような私立の女学校がこの沿線に移ってくるわけです。そして、その頃から学園都市のイメージがこの近辺に作られていきますが、神戸近辺の女学校というと、このような私立の女学校のイメージが強いのも、この阪神モダニズムと結びついたイメージと重なるからではないかと思います。ポスターにも使っていたのですが、座布団に座ってバイオリンを弾く大阪の女学生の絵からも、型にこだわらない自由人的なモダニズムというのが伺えるのではないかと思います。女学生のお稽古事にもそうした一端が見てとれるように思いま



図5.『花物語』昭和14年版表紙

す。このような和洋折衷のたしなみ文化が女学生文化の特徴であったわけです。

このような女学生文化の特徴をまとめたものが、この図です。

右上がモダンな教養文化、西洋の哲学、文学、歴史学、音楽芸術に象徴されるような教養で、男子の教養主義の文化はほぼそこに重なってくると考えています。しかし、女学生の場合、そういう外国の文学やクラシック音楽といったモダンな教養だけではなくて、伝統的な和歌とか習字、手芸、琴、活け花のように、伝統的なたしなみの領域にも広がっています。そういう意味では、左側のたしなみ文化にも通じている。更に、大正期以降になると少女雑誌を通して宝塚に憧れたり、中原淳一の絵やそこに出てくるファッションに興味を持つという形で、大衆モダン文化

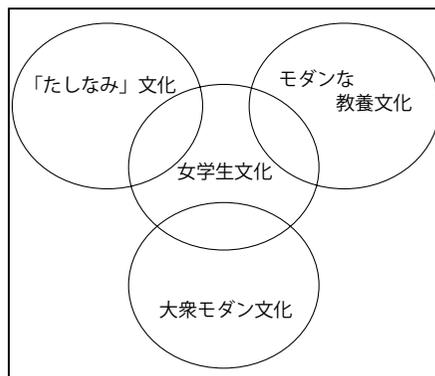


図6. 女学生の文化

化にも影響を受ける。ここが、サブカルチャー化していく、女学生サブカルチャーになっていく母体になるところです。

このような3つの世界と接触しながら、且つ、それらを融合する形で形成されたのが女学生文化と考えられると思います。明治から昭和の戦前の終わりにかけて、少しずつ中心はずれていくけれども、このような境界融合的なたしなみ文化が、女学生文化の共通の特徴だったと考えていいのではないかと思います。

このように女学生の教養というのは、幅広い領域に渡っていますけれども、それらは必ずしも職業に直結するものではなかった。しかし、だからといって主婦になった時に役立つような実用的な知識に限定されていたわけでもない。その意味でも、まさにたしなみとしての教養であったということができると思います。その特徴は、西洋の学問とか古典思想の読書に基づく教養、つまり、所謂、男子旧制高校的な教養だけではなくて、より広がりを持っていて、そうしたさまざまな領域を分け隔てなく楽しむような自由な教養文化であったということです。これが正統な教養だから身につけなければならないという堅苦しいものではなくて、好きだからやっているという純粋な興味関心に支えられている部分が大きかった。これこれの教養を身につけて、人に自慢してひけらかしてやろうとか、あるいはまた職業に就いて役に立つからというのではなく、知そのものに対する興味が原動力になっていた部分が大きいと思います。

逆にそのような目で見ますと、男子の旧制高校から出発した正統派の教養主義文化は、女学生の教養文化とはずいぶん違っていたことがわかります。まず読書にしましても、自分が好きだから読むというよりも、まず読むべきものというのがあって、それをどれだけたくさん読んでいるかが重視される。正統なものを読んでいるかどうかが重要ですから、そこには「ねばならない」という堅苦しさとか規範性みたいなものもないわけではない。だから案外身につかないところもあって、学生時代は岩波文庫を読んでいたけれども、就職して会社員になった途端、新聞は株式欄だけというような場合もある。それに対して女学生の教養文化は正統かどうかよりも自分が好きかどうかが重要なので、苦行ではなく味

わい楽しむことが中心になる。二分法で言えば、そのように持ち上げることもできるかもしれない。

かつては女性には職業が開かれていなかったから、そのような教養を活かす仕事がなかったからではないかという見方もあるかもしれません。しかしだからこそ、純粋な知的好奇心が続いたともいえるところもある。確かに戦前の女学生の多くは、卒業したら結婚して家庭に入るというコースをとっていましたから、それを活かして職業に就くことはなかったかもしれないのですが、しかしだからといって、結婚のための教養であったというわけでもなく、生きるための教養という面がかなり強かったことは重要な点だと思います。

作家の田辺聖子さんは大阪の女学校を卒業していますが、吉屋信子さんの小説が大好きで評伝も書いています。彼女は、自分が女学生だった戦時中の軍国の母教育の時代でも吉屋さんの小説を探して読んでいたそうです。本を読むことは、戦争という過酷で制約された現実の中でも理想の自分と世界を持ち続ける上で大切なものだったと回想しています。女学生が文学少女であり続けるということが、生きることの意味を問うこととつながっていた。そういう意味で生きるための教養であったといえるのではないかと思います。

それでは、現代の男子、女子の教養というのはどうなっているのか。話が飛びますが、最後に少し付け加えさせていただきたいと思います。家庭の文化的経験と教育達成度の関係についての研究によれば、子どもの頃の家庭での文化的経験は、男子と女子では異なっている側面があると指摘されています(片岡栄美「教育達成と文化資本の形成」稲垣恭子編『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社2011年)。男子は、塾や予備校、家庭教師といった学校外教育は経験しているけれどもそれ以外、特に音楽、美術などの芸術方面の経験はあまり多くない。それに対して、女子の方は学校外教育だけでなく、読書や芸術方面の教養も経験している人が多い。しかもそうした家庭での文化的な経験の違いが学校の成績にも関係している。片岡によれば、男子の学校の成績は、学校外教育を受けたかどうかはストレートに成績に影響し、家で本を読んでもらったり、コンサートに連れていってもらったかどうかは、成績とはあまり関係しないが、女子の場合は、コンサートや美術館に行っていたという経験が成績にプラスに働いているようです。

一般に近年は、男女とも実学志向が強まる傾向がありますが、男子と女子とで比べると、女子学生の成績の方が直接的な学校外教育ではなくて、読書や音楽に触れて楽しむような文化と現在でも関連しているのは興味深いところです。幅広い教養に親しむことが、知的好奇心とか向上心に繋がっていることが伺えるように思います。近年では、大学を出ても就職が困難な状況にありますから、大学から職業への移行をスムーズにしていくことは、私たちも含めて非常に重要な課題です。しかしそういう状況だからこそ、どのように生きていくかを改めて考えるための教養、生きるための教養というの、一方で重要だという気も個人的にはしています。

「こころ」の主人公の「私」は、既に明治の終わり頃、大学を出ても就職がなくて高等遊民化する時代に遭遇しています。今の高学歴ニートみたいな人たちが出現して、その人たちが煩悶青年といわれたわけですが、現在もある意味では似たような状況をもう一度別の形で経験しているといえるかもしれません。そういう時代に、職業に結びつく教育や資格ももちろん重要ですが、別の面の教養というの、

もう一度考え直すことも必要ではないか。女学生が大切にしていた教養の系譜というのを改めて見直すことの意味もそういうところにあるのではないかと考えています。以上で終わりにいたします。ありがとうございました。

一色：稲垣先生、どうもありがとうございました。明治から大正、そして現代にも繋がる女子学生の教養というものがあるような気がします。それでは、池田先生、お願いいたします。

池田：では、基調講演をいただきました稲垣先生のお話について、コメントさせていただきます。稲垣先生の講演は格調高く、学問という感じで若干気が引けますが、コメントさせていただきます。なぜ、私がコメントするのかは、これから説明させていただきます。私は本学の人間科学部、文化社会学科の池田です。よろしくお願いします。

私は女子というものに関心を持って、研究をしています。特に若い方はそうだと思いますが、女子力とか女子会とか普通に使われていると思います。私も学生さんの Facebook などを見てみると、今日は女子会をしましたというのが載っています。それは実は、ご存知の通りとても新しい言葉、女子力もせいぜい 2000 年に入ってから言葉です。そうしたものが何の疑問もないくらい定着しているわけです。ここまで普及して定着して皆さんのアイデンティティの語りの中、行動の語りの中にも、或いはメディア上の表現の中にもとても普及している。にも関わらず、それが一体何だろうという研究はなかったわけです。それを私と甲南女子大学の他の学科の仲間、学外の方にもご参加いただいて、研究をしているわけです。

本来「女子」という言葉は、ご存知の通り、女の子を指すわけですが、今普及している「女子」という言葉は、成人の女性に対して使う、或いは、大人になった女性が使うものであるわけです。そういう意味では、やはり新しい現象ですので、現代型の「女子」の意味は何なのか、今のところメディア上の表現だけですが、そこに着目して研究しているわけです。本日は簡単ですが、「女子」という言葉の変遷過程と言葉の意味するところは何かをお話した後、先ほどお話いただいた女学生文化との類似点を探してみたいと思っています。そしてその後の議論につなげたいと考えています。

いきなり宣伝になりますが、本学の文学部メディア表現学科の馬場先生と私が編集した『「女子」の時代!』という本があります。本日の報告は、この中の私以外の研究員の成果も含めてお話しします。また、女子学研究会というのやっています、これも 2 ヶ月に 1 回集まって研究しています。関心がある方は、「joshigaku.net」とグーグルで検索していただくと出てきます。主に、女性のサブカルチャーの研究をしています。そうした意味でも、女学生文化はサブカルチャー的なものが濃いですので、重なる部分も大きいかと思っています。

「女子」という言葉は、元々伝統的な言葉でありまして、「女性」よりも古い言葉でして、女性全部を指す言葉です。「子」というのは、子どもという意味ではなくて、人間という意味ですから女性全部を指すわけです。この言い方は今も残っていて、「女子サッカー」「女子トイレ」「女子挺身隊」という言葉がありますように、元々は女性全部を女子と呼んでいたわけです。ところが、戦後の民主化が入っ

てきまして、「女性」という言葉が優位になっていく内に、「女子」のポジショニングは女の子の方に限定されていくわけです。そうした「女性」に優位を奪われて「女の子」へと囲われていった「女子」という言葉が、再び2000年代に入りますと大人の女性を指す言葉として登場するのです。これが現代の「女子」であります。

元々、「女子」という言葉が流行ったのはどの辺りからかという、これは安野モヨコさんです。「美人画報」の中で「女子力」というものが使われ始めてから流行り始めたといわれています。皆さん安野モヨコさんをご存知かと思いますが、「働きマン」などの有名な漫画を描いておられます。ただ、ここでは「女子力」は女性の美しさ、男性を魅了する力、として定義されていました。これが、やがて獲得されるものとしての「女子力」となりまして、消費、マーケティングと結びつきまして、要は女性がかいになりたいたいということそのものを「女子力」をつけるという言い方で言い換えることに変わっていくわけです。これで一気に女子力という言葉が広がるわけです。皆さんも「女子力をつけたい」と「エステに行きたい」とを同じ意味で使われるかもしれません。

ところが対異性、異性を惹きつけるという意味での力だった「女子力」という言葉は、これは言葉の普及とともに意味を変えていき、例えば仕事の中の女性の力へと変わっていきます。「ビジネス力を兼ね備えた女子が日本の市場を動かす」とか「キンビールで働く女たち、営業も商品も女子力で突破」「女性リーダー5人が証言」「『仕事に効く女子力』の磨き方」というように、こうなってくると、もはや異性を惹きつける力ではなくて、女性が発揮するパワーそのもの、特にビジネスの中でとっていいかと思いますが、意味が広がっていくわけです。

長い引用で恐縮ですが、日本の有名な社会学者の上野千鶴子さんが、なでしこジャパンがワールドカップで優勝した後の話ですが、「女子力」とは元々男受けする女性性偏差値の高さを表す言葉だったのだけれども、ある女性アナウンサーが番組で、はからずとも使った「女子力」からは、言葉どおりの「女子」の「力」という意味が伝わってきた(中略)「なでしこ」は「闘志を持った女性」の代名詞に、「女子力」もこのぶんでは「女子が発揮するパワー」と意味を転じていくだろう」と、述べておられます。ここでは、女性の力そのもの、女性の全般的な能力を指すように意味が変じてきているわけです。

最近では、はっきりとはわかりませんが、私が見るところ、そろそろ「女子疲れ」というものが出てきて、もう「女子」は卒業、「子ども女子」はもういいとなりつつあるように見受けられます。この雑誌の中では、例えばこれは「an・an」の読者に関するアンケートですが、「女子と呼ばれることに抵抗はありますか」との問いに対して、あるが47%、ないは53%。女子とっていいのは何歳までですかは28.7歳というアンケート結果が紹介されています。このようなところに見られるように、女子の意味も更に変容しつつあり、「女子的には」「女子だもの」と自分を甘やかしたりしているというイメージになっているようです。元々ポジティブだった意味合いだったはずの「女子」が、ネガティブな意味あいになりつつあるということです。

新しい「女子」の用語法を簡単にまとめておきますと、「女子力」、これが主に「女子」の言葉を引っ張ってきたわけですが、第2の用法としては、男性の趣味領域に女性が入っていった時に使われます。「オタク女子」「女子カメラ」「鉄子」これは、多分、「女子サッカー」「男子サッカー」「男子トイレ」「女

子トイレ」のノリだと思うのですが、そういう用法も多いです。また、女性同士の絆を刺す場合、「女子トーク」「女子会」「腐女子」「女子旅行」、このような時に「女子」という言葉を使います。

「女子会」女性だけで行うパーティで、2008年ぐらいから女性の間で広がったといわれています。2010年の流行語大賞でもあります。「女子会」の魅力としては、ここに挙げている通り、女性同士の情報交換、友情を深める、本音で語り合えるなどです。重要なのは、「女子会」というのは非常に象徴的な現象でして、つまり男性の領域である居酒屋というパブリック場所に、そこに女性だけで行ってパーティをするようになった。これが重要なのです。例えば男性に連れられて女性が行くことは普遍的な現象ですが、そうではなくて、女性だけで乗り込んでいく。これが「女子会」のエポックメイキングなところだといえると思います。そうした「女子」という言葉は何を代表しているかということ、この辺りはまだ仮説の域を出ないのですが、次のように考えています。

従来女性は、社会的役割で規定されてきた面があります。「母」「妻」「シングル」「娘」というものです。戦後女性が開放されたと言われるのですが、その後は男性と同じになることというのが、ある種目指された面があります。でも、男性と同じになる方も社会的地位で決められる方もどちらも男性目線なのです。対男性で自分がどうかということです。ところが「女子会」とかはそうではなくて、女性との関係で自分のアイデンティティを紡いでいこう、作っていこうという運動に見える。あるファッション雑誌からの引用ですが、「母です。妻です。シングルです。私たちみんな『四十代女子』です。」と書かれています。これは解放と言っているのではないかと私自身は思っています。

では、なぜ「女子」という言葉を使うのかですが、「女子」の言葉の中には、女の子という面が拭い難く入っていますので、これが無邪気だし、自由だしというニュアンスを持つことは確実です。ここに新しい女性のライフスタイルが交じり合っ、利用されているのだと思います。暫定的ですが、女性はより自由に趣味を楽しむようになって、従来のジェンダー差を超えつつある。女性は女性同士の絆も作りつつある。そういう新しい女性たちが、従来のステレオタイプから自由になるために「女子」という言葉を使っているというような結論を持っています。

そこで、女学生文化とどうなのかということですが、女性同士の絆を志向しているということとかなり似ていると感じました。これは、稲垣先生の著書から引用をしましたが、「女学校を卒業した後も、しばらく途切れることはあっても、連絡を取り合っ定期的に会ったり、(中略)結婚後も自分の所与の「現実」の中でもう一つの世界として維持されていったのである」。まさに女性同士の絆を志向している。これが一点です。そしてもう一点は、やはり女学生文化も少女性であることへのこだわりが見えるような気がします。これも先生の御本からの引用ですが、林真理子の小説の中で出てくる主人公が「人はどうして少女のままで生きてはいけないのだろうと思う」と問うのだけれども、稲垣先生は、本を読むということが、現実を相対化しその内側にもう一つの世界を持つことを可能にしてくれると書いておられます。そうすることで、ある種の少女性を維持するということを言われています。「大人女子」の方はもっと外に表現しています。「大人カワイイ宣言」というのをしてしまっ、大人の女性による「カワイイ」というものの奪用、自分なりに取り込んで、自分流にアレンジするという側面を全面的に出している。片方は内蔵して、こちらは外に出ているのですが、スピリットは同じような気がします。

最後ですが、現在の「女子」の意味は、稲垣先生が本の中で問うておられる、この問いに対する回答のように見えます。大人になることが改めて問われる中で、「少女であり続けること」の意味はどのように変わっていくことになるのだろうか、稲垣先生がある御本の中で、最終的に仰っておられるのですが、「女子」はそれに対する回答と言えなくはないと思います。現在、皆さんもご存知の通り、女性のライフコースは不安定化しています。結婚も就職も難しくなりつつある。そうした中で女性の生き方が多様化しつつあるのですが、その時に自分は「○○です」と言葉で、どのように表現するかという問題が登場してきます。その時に「少女っぽさ」であるとか「カワイイ」というのを内臓して生きていく大人、こうした人たちのことを「女子」と呼んでいいのではないかと私は考えています。この私の見方に立てば、現在の女子というものの生き方の中に女学生文化と通低するものが見えると考えております。この点に関しては稲垣先生のご意見を伺いたいと思っています。以上です。

**一色**：池田先生、どうもありがとうございました。非常に密度の濃いコメントをいただきました。池田先生の問に対して、稲垣先生のお考えをお願いいたします。

**稲垣**：私の話が長くなってしまって、池田先生のお話を縮めてしまったかもしれません。聞いていて、私が普段考えている脈略を、時間的にも空間的にも違う角度からで照らし出されるようなお話で、なるほどと思って聞いておりました。

私は90歳ぐらいのおばあさんたちの集団にインタビューをした時に、話を聞いているうちに殆ど少女に見えてきた感じがして、とても不思議な感覚をもった記憶があります。だから、幾つになっても、「大人カワイイ少女」であるということが私にとっては女学生おばあさんたちの魅力だったのだと、今日、池田先生のお話を聞いて、現代の女子、「大人かわいい女子」と共通しているところがあるなあと思いました。少女っぽさを内面に温存していて、それを必要に応じて繰り出しながら、制約された生活の中でもそれを大切にしている。したたかというのとは違う、軽やかな少女っぽい生き方というのが魅力的に思えます。

**一色**：時間となってしまいましたので、ここで第一部は終了いたします。

### 【休憩】

**一色**：それでは、第二部を始めます。ここまではお二人の先生にご講演いただきました。それに関係してディスカッションを進めていきたいと思います。今日は女性の方が結構多く来ていただいているようです。どなたかご質問、コメントなどいただけますでしょうか。

**一般 A**：大阪から参りました。ミッションスクールのお話が出ていましたが、ミッションスクールのご本を出された時に読みました。その一番最初に、京都のミッションスクールの方々を賢く

金持ちキリスト教とかかわいい金持ちキリスト教と、要するにミッションスクールに行くのは、金持ちの子どもでないと行けないという感じを受けたのですが、その当時のミッションスクールに行かせるような社会階層の方はどういう方が中心なのでしょう。

**稲垣:** ミッションスクールについては、佐藤八寿子さんの書かれた本があります（佐藤八寿子『ミッションスクール』中公新書2006年）。そのなかで、たしかミッションスクールは3Kつまり、きれい、かわいい、かねもちと書いておられたように思います。特に戦前の明治の頃のミッションスクールは、場所にも寄りますが、特に東京などは、華族、士族が多かったようです。そういう意味ではやはりかなり経済的にも社会階層的にも恵まれた人たちが多かったと思います。地方の女学校の校史などを見ていると、西洋への憧れが強くて寄宿舎に入れても子どもをミッション女学校に行かせたいという場合もあったようですが、多くは階層が高くて家庭でもある程度、西洋文化に親しんでいる家が多かったと思います。戦後もそういうイメージはある程度続いていたと思います。

**一般 A:** 太平洋戦争の最中ですが、女学生の数が15%ぐらいから25%に増えています。あの辺りは、どのような方が急に女学校に行くようになったのでしょうか。あの時期に女学校が急に増えたのでしょうか。それとも何か良妻賢母を養うという感じで女学校を造っていき、女学生の数が増えたのでしょうか。

**稲垣:** 生徒数の伸び率が急激に高くなったのはまず大正の中盤から後半にかけての時期にありました。社会的に裕福になって女子を女学校に行かせることがその家庭の豊かさのシンボルになった面もあります。それとともに女子の進学熱も高まり、高等教育、大学も作ろうという動きもありました。ですが、実際に女学生数がマス化するのは1930年代に入ってからです。ただ、昭和18年ぐらいからは、実際には十分に授業ができませんでしたし、英語などは教えなくなりましたから、途中で終わって、戦後、もう一年だけやるとか3年で繰り上げ卒業というのもあったので、戦時中の女学校に行っていた人たちは、少しコンプレックスを感じたりしているみたいです。自分たちは前の世代に比べて勉強をしなかったと思われるというのが非常に不満で、戦後になって読書会とか勉強会に参加して続けるということもあったと思います。

**一色:** 議論を積み上げるところが時間の都合でできませんでした。それぞれの先生がお話をしてというところで終わってしまいましたので、逆に、池田先生から稲垣先生に対して、現代に通じる部分の他に何かありましたら是非お願いします。

**池田:** 歴史的なところはさることながらとりあえずおいておいて、現代の大学生について伺いたいと思います。例えば文化資本の一例として習い事ということが出てきましたが、最近の大学生

の習い事状況はご存知ですか。

**稲垣**：最近の大学生文化の事情は案外知らないなので、特に女子学生についてはむしろ先生にお伺いしたいです。

**一色**：では、本学の細辻先生にお願いしましょうか。

**細辻**：最近の女子学生の習い事状況ですが、一番ピアノが多いです。8割、9割です。具体的にいろいろと挙げていくと、水泳と書道が多いですが、それ以外にもいろいろなものを習っていますが、茶道、華道はあまり聞きません。この5、6年ではバレエとかダンスが増えてきています。でも、通算していくつ習ったのかというのは、8つ9つ10は言いますが、続いていない。小さい時に何年間やって、それを辞めて次に何をして、それもあまり好きでなくて、次に何をしてと持続力が無いと思うのですが、たくさん数をこなしてきたことが後々、自分が親になって、子どもを見た時に、いろいろなものを勧めたり、アドバイスしたりということに通じていくのかもしれませんが、長い目で見ると、そういうことと学歴、女子の場合には、いろいろな芸術的なことに接したということが学歴の高さと相関することと少しは関連していくかと思います。こちらの女子学生は、多分、家庭の階層は高い方だと思いますので、それも配慮して考えないと一般の女子学生がすべて習い事をたくさんしてきたと言っては言い過ぎかもしれないのです。男子学生については、知りませんが、読書もしない、習い事もしないという男子学生の世界がどのように広がっていくのかと勝手に想像します。

**池田**：今、習い事の話をしました。稲垣先生のお話にありました3つの円の中に、モダンな教養文化、大衆モダン文化、これはサブカルチャーだと思うのですが、そしてたしなみの文化ということで、たしなみの文化というのを一つの女性的な教養の中核においておられるというパターンだと思うのですが、現代の女性版のたしなみというのは、何なのだろうかというのを考えています。その時に習い事的なものがどのように共有されているかということが、そういうものを作り上げているのかもしれないと思っています。大衆モダン文化の方は、現代では漫画とかアニメとかが普及してしまっていて、大学生であろうが大人であろうが読んでいます。今回、私が触れられなかった部分ですが、現代風のたしなみというのは、どのように捉えられるのかと少しアイデアをお聞かせいただければと思った次第です。

**稲垣**：今だと、おもてなしの方が多分、ピンとくる言葉なのでしょう。それに近いようなたしなみ文化というと、最近のコミュニケーション能力というのが思い浮かぶかもしれませんが、それもちょっと留保が必要です。今日、私はたしなみ型女性文化の方が味わいがあるという文脈で話をしましたが、個人的にはオタク型男子教養主義も重要と思っています。京大では「イカ京」と

という言葉があります。いかにも京大生という意味で、ださいファッションだけれども何か好きなことに打ち込んで誰が何と言おうと好きな本を読むとか、場に合わなくても自分が興味のある話をしてしまうという、コンパでは嫌われるタイプです。最近はあまりいなくなりましたが。教養主義は基本的にストック型の知ですが、ストックにはストックのよさがある、ストックがきちんとある時代には、フローが良く見えるのですが、ストックがなくなってフローの時代になった時に、更にコミュニケーション能力という、意味が違ってくるように思います。口先三寸でその場その場の波に乗っていいことをコミュニケーション能力というとしたら、それはまた、たしなみという概念とは逆転してしまうように思います。ウイットやユーモアのある会話とか、相手に対する気配りや気遣いを伴ったたしなみ的な教養とは何か違うという気もするのです。グローバル化とかコミュニケーション能力といって表層的なところばかりが強調されると、それはまた、たしなみ型教養とは違うのではないのでしょうか。そのあたり、池田先生にもご意見を伺えればと思います。

**池田：**そうですね。ですから現代型のたしなみというのが、どの辺りに位置するのか。それは具体的にどのような現象なのかというのは、私にもアイデアを出せないわけですが、是非この場でいろいろアイデアをいただいて、我々も研究に活かしたいと思います。

でもおっしゃるように、いわゆる男性的な職業というものが、大分と衰退してきて、サービスとか販売など、女性的な気配りなどが消費文化の発展とともに重要な産業になってくる中で、ある種メインストリームに女性的な才能とか気配りが浮上してくる。そうすると、それだけだと浮ついてイメージだけ先行してしまうので、もう一度対置する何かというものが必要になると、先生のお話を伺いながら考えました。それを何か言えないけれども、今のところは、先生としてはそれはたしなみである。それは女学生文化から引き継いだものと、ある種の重なりを持って語ることが可能であるから、そこから分節化できるとのお考えかと思って聞いておりました。なかなか興味深いお話だと思って聞いていて、ハイパーメリトクラシーという言葉もありますけれども、それをどう分節化して、しっかりと教育の中に落とし込んでいくかというのは、非常に大きな課題であると思っています。

**稲垣：**大学教育だけではありませんが、教育の基本はストック型です。ですから、二項対立でストック型とたしなみ型という誤解を招きますが、どちらか一方でいいということではないと思います。日本とかドイツでストック型が優位なのは、短い期間に近代化を果たさないといけない場合、ストック型の知にならざるを得ないということもあります。それを長期にわたってこなれた文化にしていったものがたしなみ型教養だと考えています。だからそのストックを外して上だけやろうという、むしろ逆転する状況になってくるのではないかと。短い期間に追いつかないといけないという前提でのコミュニケーション能力となると、結局、文明化という意味での教養にはなっていないのではないかと思います。

**池田：**圧縮型の近代ということがよく言われますが、急激な近代化と女性の解放もほぼ一緒に進んできたのが日本だと思います。その中で女性がどう社会に関わって行って、その時にどのような能力を身につけていくべきなのか、おっしゃる通りのお話で、短期間で一直線にものを作る才能から、それを土台にしつつも更に彩りを与える、色調を与えるというかある意味、即時的であるけれども、全くの自己完結でもないという形の知識というものをどう考えて大学教育に活かしていくのかというのは課題です。今日何っても問題意識として自覚したように思います。

**一色：**明治の文明開化から明治が始まりまして、大正、昭和ときました。そのところでは、追いつき、追い越さないといけないという使命があったが故に、日本的な男子の教養というのは、先生がおっしゃったような溜め込み型、そういうところで、努力、勤勉というようなことで進んでいったのですが、そこに日本の女性の方は、ヨーロッパの教養みたいなものも取り入れながら、たしなみみたいなものを作っていったわけです。ですから、そういう意味でいうと、女性の女子力がとても活かされてそのような文化が出てきたと思うのです。

これからも女性の力をどんどんこの日本の中でやっていくためには、更なるたしなみとか、一方ではできないというお話もありましたので、男子の方のストック的な部分を刺激しつつ、進んでいくことができるのではないのでしょうか。ある心理学者は、21世紀は女性の時代だ。経済的な商品などを開発するというのも女性の方が入っていくのではないかというようなことも言っている人もいます。その意味で、私は、今こそ正に男性よりは女性がしっかりとがんばっているいろいろなことをやっていける時代ではないかと思っているのです。実際の歴史をみると、どうしても戦前の家族形態であれば、男性の方が主になっていて女性は、それをサポートしていくということだったのですが、これからの時代は正に平等ですから、平等の中で今まで経験してきたハンサムウーマンの能力などをいかにこれからの時代にしっかりと活用していくかが一番のポイントではないかと思います。いかがでしょうか。

**稲垣：**ハンサムウーマンという言葉を使っていただきましたが、従来、理想的人間像は男子をモデルにしてきたと思うのですが、最近は理想的女性像ではなくて、理想的人間像のモデルとして女子が出てきているのではないかと思います。だから、女子のスポーツ選手が格好いいハンサムウーマンに見えたり、明治の新島八重などを引っ張り出してきてハンサムウーマンと言ったりしましたが、ウーマンというよりヒューマン、女子の理想像というよりは、男子も女子も含めて何か理想的な生き方の象徴を女子にみているという風になりつつあるのかと思います。そういう意味では、確かに女子力の時代といえるかもしれないです。

しかし最近では、男子問題の方、どうすれば男子が元気になるのかということの方が問題になりつつあります。今、ジェンダー問題というと、イギリスの文献などでは男子問題を指すようになっています。女子は成績もいいしきちんとやる、目標もある。ところが男子のほうは目標を見失って、そして成績も悪くなって何をしたいのかわからなくて暴れる、無気力になる、それで引きこもる。学校問題、ジェンダー問題は男子問題になっているのです。日本ではまだそこまでにはなっていませんが、男子問題が徐々

に焦点になりつつあります。そちらの方が改めて問題になってくるのかという気もしますが、その辺りは、男子を代表してというわけではありませんが、いかがでしょうか。

**池田**：現代の男子を代表しろと言われるとつらいですが、確かにやはり私は女子大にいるからかもしれないですが、女性の方が元気であるというのは単純に思います。非常勤講師で共学のところにも行きますが、「先生」と話かけてくるのは女性の方が多くて、男性の方は話かけるとそれなりに自分なりのものを展開するのですが、何か寄ってきて話かけてくれるのは女性です。女性の方が突破力があるのかと思います。そういう意味でも、男性はある種一本化された道を生きてきましたので、就職して結婚して、子どもと奥さんを食べさせていくという一本化した道しか用意されていなかったところに、それが難しい、ライフコースとして不安定だと言われてしまうと、では、私に何が残っているのかと思っても、それは当然かと思えます。他の道を模索してあげるのは、社会全体の問題として大事ですし、フワリと社会に関わっても大丈夫だよと言ってあげるのも大事かと思えます。

特に引きこもりの統計なども見ますと、やはり男性の方が引きこもりが多いですので、男性の方が挫折をした時にそれをとりあえずおいといて、それでも尚関わり続けるという切り替えが難しい時代なのかと思っています。

**一色**：明治からのお話を伺っていても、男性の方がやはり物事を自分で自分の考えでいろいろなことをするのはなくて、何か哲学者のこの本を読まなければいけないとか、これでは自分の発想が出てきません。何か教育の中にもそういうのが明治、大正、昭和とずっとあり、教科書的な匂いというのは、何かを覚えなさいなのです。何かを自分で新しく考えて想像しなさいというのがない。その時代を男性がメインになってやってきた。そういう部分が今、池田先生、稲垣先生がおっしゃったようなところに来ているのではないだろうか。女性の方が、これからはしっかりと東京大学に入って、いい会社に入ってと言われなところの環境で育ったが故に非常に自分の考えなり、ゆったりとしたハンサムヒューマンというのが培えたのではないか。だから今度は男性にそういうような環境を与えなさいという時代かと思ったりします。細辻先生いかがでしょうか。

**細辻**：男性の肩に押し掛かるものの方が重いですから、女性の方が軽やかに生きていけるのだろうということが大まかに言えばそういうことで、それを同等に責任も両方が持つてとするには、女性も少し自由なだけでなく辛い部分も肩代わりしてあげないといけないのかと思います。男の人は妻子を養わなければいけないし、大変そう、自分はそういうことをしなくて専業主婦になっていろいろなことをしたいというまだ社会に出る前の願望ですが、そういうのが強いので、対等にするには、いろいろな社会のことも引き受けて両方が相互に思いやってということになるでしょうが、中々難しい。女性が引っ張るところまでは、難しいという気はするので、もう少し生

産的な社会の仕事を喜んで楽しんでできるところまでいかないと、趣味的な世界で自由にすることがいいことだとなってしまうと、男女分業のままいってしまいますので、難しいところだと思います。

関係がないかもしれませんが、明治の初めに東北からたくさんハンサムウーマン系の方が出た。西高東低ではなくて、東の方の出身の女性、もちろん出身は関西以西だけれども、東京に行ってそちらで活躍ということもありますが、なぜか明治の初め頃は特に目立って東京より北、東の方の女性に覚悟があるというか、そういう感じはありますか。

**稲垣**：今日、選んだ女性4人は偶然に東北出身の人ばかりです。しかしもうひとつ、反藩閥、つまり明治の時にリードできなかった藩の出身というのも興味深いところです。薩長以外の藩の出身者は、明治政府に対しても近代化に対してもアンビバレントな態度になりがちです。だから近代になっても武家娘の強さ、自制心でがんばろうという気持ちと明治国家に対する恨み、それが両方重なってある種特殊な強さを持ったのではないかと思います。封建社会の中では忍耐という形でその強さが保守化していたのですが、明治になってそのアンビバレンツが単なる忍耐力を超えて挑戦する力になる。その独特の魅力を放ったのではないかと、それが現代ではハンサムウーマンに映るのではないかと思います。今日はあまり言わなかったのですが、そのあたりのことは私も面白いと思っているところです。

特に会津は非常にづらい経験をしているわけです。また今日取り上げた人の中では、杉本鉞子さんはわりと上の方の士族層ではありますが、それでも殿様との関係で裏切られた家の娘です。ですから、蝶よ花よというような所謂お姫様育ちではないので、反藩閥というのは象徴的な意味です。だから男子の場合、徐々に大きな物語、立身出世して国家のために働くという物語がなくなってくると折れてしまう弱さがあるけれども、ハンサムウーマンの魅力というのは、もっとしなやかがあるというか、逆境があってもすかしたり、溜めたり、前に出たりと、潜り抜けていく力を感じさせるところにあって、それが時代の流れが変わっていく時の変革の時代の大きな力にみえたりします。そういう生き方がハンサムウーマンとして、今のようにやはり先の見えない時代には魅力を放つのではないかという気がします。

**一色**：他の方で何かご質問などございますか。

**一般 B**：私は38年間教員として働いてきました。主婦として母として子育てしながら男社会の中で働いてきたのですが、男性と同じように働きたいのにも関わらず、時間になると帰らないといけない。家に帰ったら、食事を作って子どもの世話をしないといけない。男の方と同じ給料でやってきてもっとやりたいのにできなかったというそういう中でやってきて、私は教員を終えてからカウンセラーとして開業をしていて、この7月からセミナーを毎月しています。この前に女性とキャリアについてセミナーをしたのですが、とても好評でして、自分もやはりキャリアウーマンとしてやってきましたが、何かもっとやりたかったのに、やれなかったという思い、ある男性の

方から必ずやれる時がくるからと言っていたら、それが今なのかと思いました。

また、反対の見方で、稲垣先生のお話で明治、大正、昭和と日本の母たちがとてもがんばってきて、男性にはない力をずっと蓄えてきたというプラスの面をお聞きして、とても元気が出ました。確かに男性と違って女性は耐える力も強くて、その時にはできなくてもまた時間が経ってからいろいろと手を変え、品を変えて自分らしくやっていきたいという力は女性にはあると思います。今日は違う角度からもう少しやりたかったのにできなかったという思いとはまた違う意味で女性がんばってきてすごい力を持ってきたということと、私も一般教養的な昔から本を読んだり、絵を習ったり、そういうことがとても好きだったので、それが女性の学力と結びついているということを知った時にはとても嬉しい気がしました。確かに、今の若い人で、京大とか行っていますが、何かあって折れたらコミュニケーションもできないし、折れたら折れたでそういう弱い部分を見てきていますし、今日は何か考えさせられました。女性とキャリアの話をした時に、かわいい女性になりたいという中年の女性の話があったのですが、そのことと、今日の話とが結び合わさって、何か素敵だと、少女性も加味して、芯の強いなでしこジャパンではありませんが、やはり女性として生まれてよかったと思いましたし、自分の後の人たちにも、女性のいい面を伝えていきたいと思いました。やはり男性性と女性性があって、女性がリードしていくというのは少し違うのではないかと影の力で引っ張っていくというのはあると思うのですが、やはり全面にでるのは男性であって、これは生物学的にも考えてやはり男性が元気で、引っ張っていくというのが男性力ではないかと思っています。それを支えて裏側ですごい力で男性を支えていくのが女子力ではないかと私は考えております。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般 C：京都大学の院生です。本日はお話いただきありがとうございます。コメントというよりも池田先生にご質問させていただきたいのですが、女子という言葉の変遷についてお話いただきましたが、2000年代に入って、新しい女子が登場したということでしたが、この新しいという言葉について、戦前と違う新しい女子ということなのかと思ったのですが、話を聞いている内に、安野さんが用いた女子力の中で語られている女子というのは、美しい女性であったり男性を魅了する力がある女性という語られ方ですが、それが徐々に2012年では、女子が力のある女性というような使われ方をしている、2013年の「an・an」の記事の中では、もっとネガティブなイメージに変わっていくかと思うのですが、それらすべてを指して新しいとおっしゃっているのかそれとも変遷していくことを新しいとおっしゃっているのかを伺いたいです。あと安野さんの記事が何年のものかも教えていただきたいのです。

池田：ご質問ありがとうございます。私が新しいと言っているのは、非常にシンプルな意味でして、2000年以降全部を指しています。女の子だけを指していたものが、成人の女性を指して「女子」になるというその一点だけです。ところが説明しましたとおり、元々「女子」という言葉は女性

全般を指していましたので、そういう意味では新しくないというか、元々のところに戻ったとも言えなくもないわけですが、最後の「女子疲れ」のところで言いましたが、依然として年齢規範は厳しくて、40歳にもなって「女子」というのはおかしいという意見はネット上でも見られます。そういう意味では、女性全般を指していた「女子」とも違うと思います。「女子」に対する年齢規範への抵抗としても読めるので、その意味では新しいと言っていいと思います。この辺りの変遷に関しては『「女子」の時代!』の中で河原和枝先生が書いていらっしゃるのので、そちらを読んでいただければと思います。河原先生に準拠してお話しております。

それから安野さんの連載の中で女子という言葉がでてくるのは、単行本でいうと、2冊目の『美人画報ハイパー』の方でして、確か2001年だったかと記憶しています。その前の『美人画報』の方には、出てきてなかったと思います。ですから、「女子」という言葉が出てくるのは、2000年に入ってからというのが適切であろうというのが、今のところ我々が考えているところです。

**一色**：他にいらっしゃいますか。

**一般D**：甲南女子大学の大学院生です。今日のお話を聞いていて、一番思ったのは、実は女子の方は余り変わっていない、その出方が変わっただけで、かつての女学生も教養を溜めていて、それを女学生の間は発揮していた。けれども、結婚をして、子どもを育てている間は隠していて、それが稲垣先生がおっしゃったように、おばあさんになって、自由さが戻るとそこに発揮していったというそれが現代、2000年以降にそれこそ、女子のそういう持っているものをいつ発揮してもよくなったというか、妻であっても母であっても、それを出すことに抵抗がなくなったということなのかと今日のお話を聞いて思いました。だから実は女子の教養というのは、有り方自体は、大きくはあまり変わっていない。世間的な見方と社会規範の中でどうやって発揮するかというところが変わったということなのかと私自身は感じました。だからこそ対男性で見ると、男性の部分が圧迫されているというか、女子が幅を利かせていると感じる時代になっていると思いました。

一つ伺いたいのですが、女学生の稽古事のお話で、最近、日本舞踊の家元の方のお話を読む機会があって、最近、日本舞踊を教養として習う人が非常に減っていて非常に困っているらしいです。かつての日本女性のお稽古事の中に日本舞踊というのがこの表の中にはなかったのですが、それはあまり、女学校に通うような人たちの教養ではなかったのでしょうか。

**稲垣**：当時行われたアンケート等も可能な限りは見ているのですが、女学校で日本舞踊というのは、あまり上位には出てこないようです。ただ、長谷川時雨さんという江戸から明治の最初の頃にかけて東京で育った人の自伝を見ると、日本舞踊を習っています。近世のたしなみとしては、たしかに日本舞踊があったと思うのですが、女学校では、なかったわけではないと思いますが、お茶などのように女学校の課外授業に入ってくるものがメインになってきます。それもメインが小笠原流から裏千家に変わります。学校の中で、課外授業でどこを取り入れるのかというのが正

統みたいになってくるので、それで離れていったということがあるかもしれません。茶道、華道、書道は学校でもやっていました。

一色：今日は、どうもありがとうございました。ハンサムウーマン、ハンサムヒューマンそれらは、変革の時代とか逆行そういったものがなければ、できなかったのでしょうか。これからの時代、平和の時代にうまく作ることができるのだろうかということを考えつつ終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。